

国営安積開墾事業と安積疏水開さく事業

旧久留米藩士族の入植

明治11年(1878)11月11日に、旧久留米藩(福岡県)士族の移住先発隊が郡山に到着した。福島県は、同年9月に内務省へ「福島県下桑野村殖民所御委託金貸下ケノ儀」を願い出ている。県は、旧久留米藩士族入植にこの大槻原開墾の延長としての資金を充てたことから、旧久留米藩士族の入植地を桑野村に近い「大蔵壇原」(現在の郡山市久留米)とした。

旧久留米藩士族たちは、「久留米開墾社」を結社し、明治12年(1879)11月までに入植者が100戸に達した。さらに希望者がおり、50戸の追加が許可された。大蔵壇原だけでは入植地が足りず、新たに対面原(現在の郡山市喜久田町)を開墾地とした。

最初に入植した旧久留米藩士族100戸は、その後国営安積開墾の枠内に入り「率先百戸」と称揚された。旧久留米藩士族の入植を始めとして、鳥取、岡山、棚倉、高知等、全国から士族が入植した。当初の計画では2,000戸を想定した士族開墾は、最終的に500戸へと縮小される。



開墾率先碑

郡山市開成、国道49号線脇に建立された久留米開墾率先百戸の碑。久留米開墾40周年を記念し、大正7年(1918)7月30日に建立された。

天恩ノ隆渥其如何ソヤ、東北地方ナル福島県ニ於テハ、已ニ内外ノ情勢時務ノ本末ヲ詳ニシ、朝旨ヨリ至仁ヲ体シ民産ノ蕃殖ヲカメ、去ル明治五、六年間ヨリ同県下岩代国安積郡ノ曠野ニ殖民所一ヲ起シ、土族ノ授産ヲ講シ、桑田・稲田・道路・溝池・殖民等経画已ニ了リ、規模已ニ成リ、殆ト六、七年ヲ経過セリ、(此地新村名ヲ桑野村ト稱シ、明治九年六月聖上東巡、此地ニ行在所アリテ車駕駐スルニ日、世呼テ開成山開拓ト云ハ是レ也)而方今愈々之ヲ繼續擴張セラレテ息マズ、某等遙ニ山川ヲ涉リ觀ク此地ヲ勘測スルニ、北ニハ所謂対面原ヲ俯瞰シ、南ニハ牛庭原ヲ連抱シ、四方共ニ諸村原野ノ圍繞スル所ニシテ、形勢雄豁地味肥沃、頗ル為ス有ルノ地タリ、就中大蔵壇ト稱スル原野ハ、殖民所ニ接続シテ形情尤好シ、於是乎慨然宿昔ノ志ヲ決シ、同志相誓ヒ、老幼相携ヒ數百里ノ山河ヲ越ヘテ福島県ノ殖民所ニ来リ住シ、福島県開墾成規ヲ奉シ、殖民所中原野並大蔵壇原ノ墾拓ヲ肇メ、同盟連結シテ久留米一開墾社ト稱シ、昼ハ身ヲ耕耘ニ委シ、夜ハ心志ヲ学業ニ注キ、漸次桑畝ヲ闢キ以テ本邦名産ナル蘭糸ヲシテ益々盛大ナラシメ、上ハ天恩ノ隆渥ナルヲ報シ奉リ、下ハ人民ノ公益ヲ規面シ、中ハ各自ノ産業ヲ確立セントス、抑某等ノ故郷ニ在ルヤ、必スシモ飢饉ニ迫ルニ非ス、必スシモ居室ニ安セサルニ非ス、亦老幼婦女ノ家族アリ、親姻朋友ノ交情アリ、老幼婦女ハ憫マサルニ非ス、親々墳墓ノ故郷ヲ捨テ、玄海ノ狂瀾ヲ凌キ、箱根ノ絶険ヲ越エ、遙ニ東奥ノ曠野ニ来リ、荒涼無人ノ境ニ覽レンコトヲ期シ、虎ニ非ス、兕ニ非ス、彼荒野ニ從フノ率先魁楚トナリ、

結社大意(部分)

「福島県開墾志」県庁文書(福島県歴史資料館蔵)より抜粋 読点「、」中点「・」を加えた。原文の細字2行の箇所を()内1行とした。

安積疏水の通水

内務省は、明治11年に疏水路の測量や各原野の面積や所有者などの調査を行った。また、内務省土木局御雇長工師(技師長)ファン・ドールン(C.V. Van Doorn)の指示により、猪苗代湖の水位調査が行われた。その他、会津側の堰の調査など、この頃に安積疏水工事実施のための様々な予備調査が行われた。

明治11年11月1日から6日にかけて、ファン・ドールンによる、安積疏水の実地検分が行われた。通水予定の3通りの疏水ルートのうち、沼上峠ルートが最良であると、疏水ルートが沼上峠ルートに決定された。

明治12年10月27日に「猪苗代湖疏鑿起業ノ式」が、開成山大神宮において行われた。翌日から開始された工事は、会津地方の人々への配慮から、まず戸ノ口の十六橋水門から始まった。

約3年をかけて当時最新の技術で行った疏水開さく工事は、明治15年(1882)10月1日に通水式を迎えた。政府高官が参列し、地元の人々も通水を喜んだ。



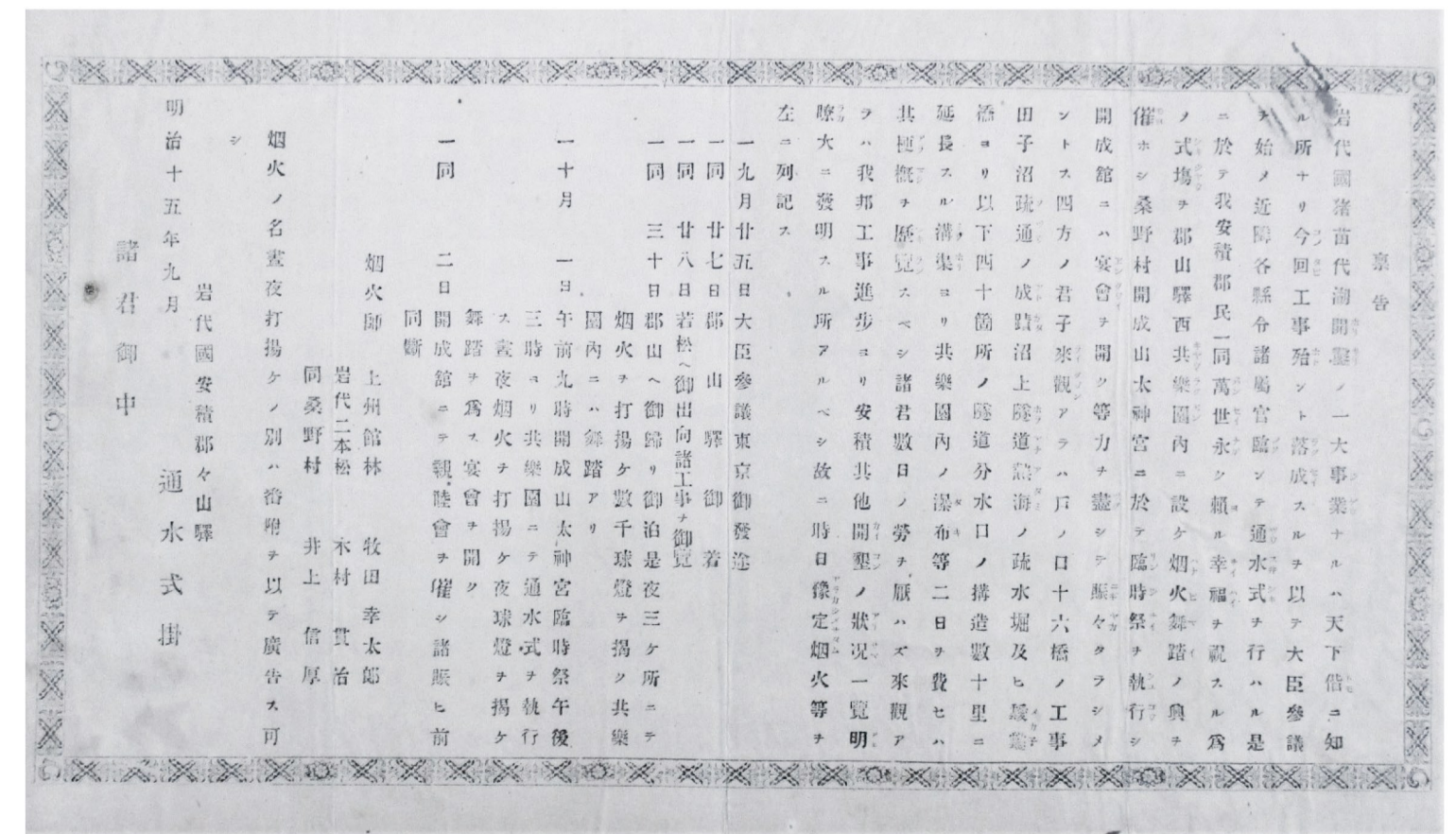
ファン・ドールン銅像

十六橋(耶麻郡猪苗代町・会津若松市湊町)脇に建つ像。近くには、ドールンの墓碑再建記念碑も建立されている。



十六橋水上の図

宮内庁三の丸尚蔵館蔵『各地勝景五 山形・安積疏水ほか』より「猪苗代湖疏水工場撮影第二圖 十六橋水上の図」完成当時の十六橋の姿。



稟告

郡山市開成館蔵 通水式掛は、通水式前に稟告書(宣伝のビラ)を作成し、配布した。